

# 『伊勢物語』初段の「いちはやきみやび」

——行動の表現としての歌——

藤 河 家 利 昭

はじめに

『伊勢物語』初段における語り手の評語、「昔人は、かくいちはやきみやびをなむしける」については多くの論がありそれぞれ意味合いも違うが、大筋のところは定まっているように思われる。またこの「いちはやきみやび」はこの物語を貫く主題であるとの説も行われている。本論では、この物語の歌がどのような働きをしているのか、作者は歌に物語としてのどのような新しい可能性を見出したのかということから、従来の解釈を見直してみたい。

## 一、従来の解釈

はじめに初段を引く。

昔、男、初冠して、奈良の京春日の里に、しるよしして、狩にいにけり。その里に、いとなまめいたる女

はらからすみけり。この男かいまみてけり。思ほえず、古里にいと化したなくてありければ、心地まどひにけり。男の着たりける狩衣の裾を切りて、歌を書きてやる。その男、信夫掬の狩衣をなむ着たりける。

春日野の若紫の掬り衣しのぶの乱れ限り知られず

となむおひつきていひやりける。ついでおもしろきことともや思ひけむ。

陸奥のしのぶもぢずり誰ゆへに乱れそめにし我ならなくに

といふ歌の心ばへなり。昔人は、かくいちはやきみやびをなむしける。<sup>(1)</sup>

「昔人は、かくいちはやきみやびをなむしける」もしくは「みやび」には次のような説が行われている。現代の主なものを挙げることにする。

元服早々、都の女を無視するかのように、古里「奈良の京春日の里」へ狩に出掛け、そこで、思いも掛けずに里の女に執心してしまう主人公。そこには打算や思惑は全くない。「俗」のかけらもないのである。そして、みずからの思いのままに、すぐさま我と我が衣の裾を切り取って歌を書いて贈るためらいのなさ。若さのままだに振るまう主人公のこのような行動のすべてに「いちはやきみやび」という評語を与えた語り手は、前述のような中国伝来の「雅」や「風流」の真意を知った人であったと考えてもよいのではないか。

これは男が春日の里に出掛けることから歌を贈るに至るまでのすべての行動とされている。

物語作者が特に取り立てていつているのは、その青年の懸想歌が、その場合にふさわしい良い歌であったことと、又、その歌を贈るに当たって取った手段が気が利いていたこと、更に又、それらをするに時間をついやさず、機敏にしたという諸点を数え立てて、「昔人はかくいちはやきみやびをなむしける」といつて、褒めているのであって、それが一段の作意である。<sup>③</sup>

『伊勢物語』の「みやび」は、初段や十四段に見られるように、時と場合、自分と相手との人間関係、相手

がこちらに何を期待しているか、等々の、さまざまの条件を考えに入れその間を縫って、洗練された言動を作り出してゆく心のはたらきなのであって、こうしたものは、おそらく『伊勢物語』が開拓したものかと推定されるのである。<sup>④</sup>

これらは詠んだ歌を含め、歌を詠み、贈るに至るまでのことを言うのであろう。

若者は、その「内的促し」から、必然のことに「折すぐさず」この道（筆者注：「伝統的な詠歌の道」）によった。このように詠むことによつて、若者の「すき心」の激しさが、やさしい「歌」のすがたに鎮められることになる。この間の消息を十分心においたうえで、若者のこのような営為を、作者は、「いちはやきみやび」と評したものと思われる。<sup>⑤</sup>

「昔人は、かくいちはやきみやびをなんしける」という結びの文言については、多くの見解が提起されているが、私見としては、惑乱が強烈であればそれだけに、それを取り鎮める行為としての和歌の伝統への回帰の営み、そのことによる人間の連帯の確保、そこにはしたたかな反俗の精神との分かちがたさがあると理解したいのである。<sup>⑥</sup>

これらは「すき心」或いは「惑乱」を、歌によつて鎮める行為と考えられているようである。この二つの説は歌を詠む行為に重点が置かれていることが注目される。

以上の説には『伊勢物語』の精神のようなものが論じられているのであるが、先ずは初段に限つてみた時に「男」のどのような特色が語られているのであろうか。「昔、男」と語り始められる物語の主人公として、一連の行動をたどつた結果、歌においてどのような「男」の姿が立ち現われるのであろうか。作者は一つ一つの章段において歌によつてどのような物語を作り出したのかを問われなければならぬ。

## 二、上句と下句との関係

このように「昔人は、かくいちはやきみやびをなむしける」が何を意味しているかについて様々な意見がある。ただ歌についてはどのように歌を詠み、贈つたのかという行為に重点が置かれているように思われる。しかし、詠まれた歌に対する評語という視点も考えてみるべきではあるまいか。その前には「陸奥の信夫もぢ摺り誰ゆゑに乱れそめにし我ならなくに」といふ歌の心ばへなり」と、男の詠んだ歌の「心ばへ」（趣向・意味）を説いているのである。

「心ばへ」に対して男の歌に現われた男自身の行動或いは姿を言うと考えられるのである。こういう観点に立つと次のような説がある。

（筆者注：「いちはやき」を「非常に激しいの意であらう」とし、「みやび」について）結局、具体的には歌の贈答ということであらうが、歌には男女の交渉という意味合いが強くからまつてくるから、現代風に直接的に言えば、恋愛というような意味合いにならうか。

これは歌の贈答ということを「恋愛」と言われているようである。

古注では次のように説いている。

「いちはやし」とは、せつなりといふことばなり。一ぢには、すぐれたるといふよみのあるなり。すぐれてはやしとかきたるは、せちなることなり。また「みやび」とは、ふるまひなり。かんのじをかきて「みやび」とも「ふるまひ」ともよめり。されば、せちなるふるまひしける人となんいへり。（『知頭抄』）

これは歌を詠んで贈ることを言うのであらうか。

「いちはやき」は逸早とかく。すぐれてすみやかなる心也。是によりて、人の性の急に、おもひのどめぬをば「いちはやき」といふ也。「みやび」は日本紀に「風姿」

とかきてよめり。みやびかに、たはやぎたるすがた也。  
爰のみやびは、いさゝか心かはるべし。人を仮粧した  
ることをみやびといふにや。〔愚見抄〕

これも歌を贈ることを「仮粧」（懸想）としていたのであ  
ろうか（筆者注：なお『拾穂抄』は、「師是は彼かりぎぬのすそ  
をきりて、とりあへず『忍ぶのみだれかぎりしられず』とよみを  
くり給へる業平の風流をはめていへる詞なるべし。是愚見抄の儀  
也」としている）。

いちはやき 早卒也。うちつけなる心也。みやび  
なさけをかはす心也。定注「嫁」字の心にも通ずべし。

〔肖聞抄〕

「イチハヤキ」早速也。卒に、歌ヲ書テヤリ、卒に返  
シスルヲ云フ。「ミヤビ」ミヤビヲカハスナド云テ、  
ユウエンニ、ケサウスル事ヲ云也。〔惟清抄〕

これらは歌の贈答のことを言うとしていようである。

以上の説は、概して歌を贈ること、或いは歌の贈答のよ  
うに取っているが、それを「恋愛」、「懸想」としているこ  
とが注意される。『万葉集』巻二の「みやびを（遊子・風  
流士）」（二二六・七）も「恋愛の情緒を解する男」の意である。

ここで男の歌がどのように詠まれていのかを見ておき  
たい。歌の前の「男の着たりける狩衣の裾を切りて、歌を

書きてやる」の文において、「男の」の「の」の取り方が  
問題とされるが、「歌を書きてやる」の主語ではなく、「男  
の着たりける狩衣の裾」と、歌を詠む対象として男が着て  
いた狩衣の裾という物の方に比重を置いているためであ  
ろう。それに続いて「その男、信夫摺の狩衣をなむ着たり  
ける」と、さらにたたみかけるように述べている。ここで  
も「その男」と繰り返している。このことは男の歌が即興  
的であるとともに、男が着ていたということが重要である  
と思われる。それを次の歌との関係から考えると、「男の  
着たりける狩衣の裾を切りて、歌を書きてやる」が上句  
の「春日野の若紫の摺り衣」に、「その男、信夫摺りの狩  
衣をなむ着たりける」が下句の「しのぶの乱れ限り知られ  
ず」にそれぞれ対応すると見られる。このことは男の歌の  
意味内容が上句と下句で異なるということと関わりがあ  
ると考えられる。即ち、上句の「春日野の若紫の摺り衣」  
によって「（春日の里）のいとなまめいたる女はらから」  
を称え、下句の「しのぶの乱れ限り知られず」によって男  
の限らない心の乱れを表わしている。しかし、一首の歌と  
しては上句から下句まで男の着ていた狩衣及びその乱れ  
模様によって一貫している。また上句は「しのぶの乱れ」  
を導く序詞にもなっている。

このような上句と下句の意味内容の相違は、さらに前の文との関係においても見る事ができる。上句は「その里にいとなまめいたる女はらからすみけり」と、また下句は「思ほえず古里にいとほしたなくてありければ、心地まどひにけり」と、それぞれ対応すると考えられる。この二文を繋ぐのが短文「この男かいまみてけり」である。即ちこの二文の間には局面の展開があるのである。前文は春日の里に大層優美な姉妹が住んでいたというのであり、後文は古里にとても不似合いな様子でいたので心が動揺したという男のことである。このように上句は単に序詞としてではなく実質的な意味を持っている。結果として上句と下句は意味内容を異にするのである。このような地の文の設定は逆に歌から構成されたものと考えざるを得ない。

### 三、「追ひつぎて」と「ついでおもしろき」

歌の後の「となむおひつきていひやりける」には様々な解がある。この「おひつきて」を、「追ひつきて」として「間をおかず、すぐに」(新大系)<sup>10</sup>、「おひつきて」として「追ひ次ぎて」(間を置かずすぐに、折を過ぐさず、たたみかけるように)の意か(鑑賞日本の古典)、「おいづきて」として「経験を積んだ大人みたいに」(集成)、「おひつきて」

として「続け書きにして」(全釈)のようである。これらの解は後の「いちはやきみやび」に関わると考えられているのであろうが、歌を遣ったこと自体は既に歌の前に「歌を書きてやる」とあり、ここは歌に続いて「となむおひつきていひやりける」とあることから、歌の贈り方ではなく歌の詠み方自体を問題にしていると考えられる。

即ち上句と下句でそれぞれ内容を異にしているにも拘わらず、着ていた「狩衣」・「信夫摺りの狩衣」によって姉妹のことから自らの心の乱れに続けて言ったのである。先の説、或いは『源氏物語』総角の「陸奥国紙に追ひつぎ書きたまひて」などから、「おひつきて」は「追ひつぎて」と取り、上句から下句へと続けてたたまかけるように詠んだことを言うと考えられる。これは上句が下句の「しのぶの乱れ」を導く序詞となっていながら、上句は姉妹の美しさを称える実質的な意味を持つためである。これは歌のあり方から外れた詠み方と考えられる。なぜそのような詠み方になっているかは「いちはやきみやび」に関連させて述べたい。

次の「ついでおもしろきことともや思ひけむ」という男に対する語り手の批評の言葉も「追ひつぎて」の問題と関連している。これについてもそれぞれ多少説が異なっ

ている。

ちょうど「信夫摺り」の狩衣を着ていたればこそ、源融の歌をふまえる即興が生きる。狩衣を切つて添え歌には模様につながる縁語を織り込み、地名「春日野」を冠して縁語の一つ「若紫」に姉妹賛美の意をこめる。この即興のあざやかさを「ついでおもしろき……」と評したもの。(集成)

(このように、しのお草の狩衣から心の乱れを歌にむ) 順序をおもしろいことだと思つたのであろうか。(全釈)

こういう折にふれて歌を思いつき、女に歌を贈るなりゆきが、愉快なこととも思つたのであろう。(新全集) 折からしのお摺りの狩衣を着ていたので、古歌の趣意をふまえて思いを訴えるのに格好の手順であると、感興がわいたのであろう。(新大系)

古歌をふまえるのは後に「といふ歌の心ばへなり」と語り手の立場からする注があり、ここは男の心を推し量つてるので別にして考えるべきであらう。ここは上句と下句との関係を考慮して、同じ「狩衣」「信夫摺りの狩衣」によつて姉妹の美しさと男自身の心の乱れを同時に表わすことができるという関連がおもしろいのである。さきの「追ひ

つぎて」が歌の詠み方であるのに対して、これは男の心に沿つて歌の趣向について言うのである。

次に、「陸奥の信夫もぢ摺り誰ゆゑに乱れそめにし我ならなくに」といふ歌の心ばへなり」という語り手の注について考えたい。この歌(古今集)巻十四恋四・七二四 題しらず 河原左大臣)も、「陸奥の信夫もぢ摺り」によつて「乱れそめにし我」と自らの心の乱れを詠むのは同じである。また「陸奥の信夫もぢ摺り」が「乱れそめにし」を導く序詞であるのも同様である。その上で「誰ゆゑに」(他の誰でもないあなたのせいだ)と、「我」と相手との関係を示して、それが男の歌では明示されていないため、この歌によつてそれを明確にする必要があつたと思われる。こゝでも男の歌の上句と下句との関係が一つの焦点になっていることを物語っている。

しかし、このことは「陸奥の」の歌の「陸奥の信夫もぢ摺り」が同じ序詞でも作者の心の乱れを暗示するのに対して、男の歌の「春日野の若紫の摺り衣」は心の乱れを表わすものではなく、姉妹の美しさを称えるものとなっている。「といふ歌の心ばへなり」としながら両歌はこの点で大きく異なっているのである。また「陸奥の」の歌は四句が『古今集』では「乱れむと思ふ」となっている(元

永本では「乱れそめにし」のに、ここでは「乱れそめにし」となっている。これは男の歌「しのぶの乱れ限り知られず」に合わせたためと見られるが、これは後述するように男の歌を心の表現としてではなく、行動の表現として見ようとしているからではないかと考えられる。

このように男の歌の後には「となむ追ひつぎていひやりける」、「ついでおもしろきこともや思ひけむ」、「といふ歌の心ばへなり」と、それぞれ視点や立場は異なるものの基本的には男の歌の特異性に拠っている。即ち上句と下句の意味内容の面で相違していることである。このことは、この場合上句が単に比喻や暗示に止まるのではなく、実質的な意味を持つということである。それは言い換えると、上句の事実に立つて下句で男がどう対応したかを語るということになる。それは心の表現に止まるのではなく行動の表現として示されるべきものであらう。物語として「昔、男」として語り始め、その行動を語ってきたのであるから、歌はその帰結として男がどう思ったかではなく、どう行動したか、そしてそこに男の特色がどのように示されているかを語っているのである。男はこの歌で着ていた「狩衣」によって姉妹の美しさを称え、「信夫摺りの狩衣」によって「しのぶの乱れ限り知られず」と言うことができ

た。それは「心地まどひにけり」からすると恋の極限にまで達している。そのように駆り立てる要因として、これも説があるが相手が「女はらから」と複数であるということがある<sup>①</sup>。その男の恋を「昔人は、かくいちはやきみやびをなむしける」と言うのであり、一気に突き進む一途な恋である。それをこの評語によって行動として語ろうとしているのである。物語の作者は、「信夫摺りの狩衣」という物によって、「しのぶの乱れ限り知られず」という本来は心の表現であるものを行動の表現とすることによって物語の新しい境地が開かれると考えたのであらう。この物語の歌が行動の表現となり得るかについて関連があると思われる章段を検討してみたい。

#### 四、「武蔵野の心なるべし」

初段と同じように男の歌を古歌の「心」とする四十一段を検討する。この段は初段との関連性が指摘されている。

むかし、女はらから二人ありけり。一人はいやしき男のまづしき、一人はあてなる男もたりけり。いやしき男もたる、十二月のつごもりに、うへのきぬを洗ひて、手づから張りけり。心ざしはいたしけれど、さるいやしきわざも習はざりければ、うへのきぬの肩を張

り破りてけり。せむ方もなくて、ただ泣きに泣きけり。これをかのあてなる男聞きて、いと心ぐるしかりければ、いと清らなる緑衫のうへのきぬを見いでてやると、

紫の色濃き時はめもはるに野なる草木ぞわかれざりける

武蔵野の心なるべし。

「武蔵野の心なるべし」は、「あてなる男」の歌が『古今集』の「紫のひとつとゆゑに武蔵野の草はみながらあはれとぞ見る」(卷十七雑上・八六七 題しらず 読人しらず)の、一人のためにそれに繋がるすべての人が愛しく思われるという意味と同様であると言う。また「紫」、「野」、「草」などの語とともに、男の歌も表は全く野の風景として詠まれたものである。そして、ここでも初段の「陸奥の」の歌と同様に、「紫のひとつとゆゑに」によって「紫の色こき時は」が、地の文では直接示されていない妻への愛情であることを明らかにしている。ただ「紫の」の歌は一人に繋がるすべての人(「草はみながら」を対象にしているが、男の歌では姉妹の間のこと(「野なる草木」とする)という違いがある。また「野なる草木」は「緑衫のうへのきぬ」と同じ緑の色である。

男の歌は『古今集』(卷十七・雑上・八六八)、「紫の」の歌の次に、「めのおとうとをもて侍りける人に、うへのきぬを贈るとて詠みてやりける 業平の朝臣」として入る。「うへのきぬ」を贈る事情は示されず、その相手も「めのおとうとをもて侍りける人」である。妻への愛しさゆゑにそれに連なるあなたにも同じように親しみを抱くというのである。これは、結局それだけ妻への愛情が深いという作者の心を表わしている。それに対してこの男が歌を贈った相手は「いやしき男もたる」姉妹である。この姉妹は、「うへのきぬを洗ひて、手づから張りけり」、「心ざしはいたしけれど、…うへのきぬの肩を張り破りてけり」、「せむ方もなくて、ただ泣きに泣きけり」と一貫して「うへのきぬ」との関わりが語られている。また先述したように歌の「野なる草木」と、男が贈った「緑衫のうへのきぬ」とは同じ色である。

このことは何を物語るであろうか。この「女はらから二人」は、「一人はいやしき男のまづしき、一人はあてなる男もたりけり」と語られていた。「野なる草木ぞわかれざりける」は、それぞれ身分が低く貧しい男と高貴な男を持つた姉妹を分け隔てはできないというのである。これは「紫の色濃きときは」というように妻への愛情が深いき



に男がどういふ対応をしたかを行動によつて語ろうとしているのである。「目もはるに」は上下を繋ぐ役割を持っている。物語の展開としても格差のある男を持った妻の存在が歌において克服されるということになる。

このように「武蔵野の心なるべし」として「紫の」の歌は趣向や意味は男の歌と同様でありながら、歌のなり立ち自体が異なっている。「紫の」の歌及び『古今集』の業平の歌は、愛しい人や妻への愛情が深いゆえにそれに連なる人にもそれが及ぶということである。それに対してこの物語では妻への愛情は語られることがなく、専ら「いやしき男もたる」姉妹のことが語られている。したがつてこの男の歌は妻への愛情が深いつきにその姉妹にどう対応したかを行動によつて語ろうとしているのである。

このことは初段の「といふ歌の心ばへなり」が、「陸奥の」の歌の趣向や意味において同様でありながら、男の歌は相手に対する思いを述べるものであるよりは、それをずらして姉妹の美しさを上句に取り込むことによつて、それに対する対応の仕方を行動として語っていた。ここでは「武蔵野の心なるべし」としながらも、男の歌は妻への愛情の深さを述べるとともに、それを前提として男がその姉妹にどう対応したかを行動によつて語っているのである。

## 五、「昔の若人は、さるすけるもの思ひをなむしける」

次に「昔人は、かくいちはやきみやびをなむしける」という語り手の評語について、どういう意図を持つのか、類似した評語を持つ四十段を検討する。

昔、若き男、けしうはあらぬ女を思ひけり。さかしらする親ありて、思ひもぞつくとして、この女をほかへ追ひやらむとす。さこそいへ、まだ追ひやらす。人の子なれば、まだ心勢ひなかりければ、とどむる勢ひなし。女もいやしければ、すまふ力なし。さる間に思ひはいやまさらにまさる。にはかに親、この女を追ひうつ。男、血の涙をながせども、とどむるよしなし。率て出でて去ぬ。男、泣く泣くよめる、

出でて去なば誰か別れのかたからむありしにま  
さる今日は悲しも

と詠みて絶え入りにけり。親、あわてにけり。なほ思ひてこそいひしか、いとかくしもあらじ、と思ふに、真実に絶え入りにければ、まどひて願たてけり。今日の入相ばかりに絶え入りにて、又の日の戌の時ばかりになむ、からうじて生き出でたりける。

昔の若人は、さるすけるもの思ひをなむしける。今の翁まさにしなむや。

男の歌は、女が自ら出ていってしまうのであれば誰も別れが難しいことがあるうか。無理に別れさせられる今日は以前にまして悲しいことだといふのである。しかし、上句の「出でて去なば誰か別れのかたからむ」は、このことについて直接物語の中で触れられてはいない。そうするとこれは男がそのような別れではなく、親に無理に別れさせられることに対して「ありしにまさる今日は悲しも」においてどのように対応したかを語るものとなる。それは「男、血の涙をながせども、とどむるよしなし」というほど悲しいものであるが、男は女を止める手段がない。「ありしにまさる今日は悲しも」の「ありし」は、親が女をよそへ追いやろうとした時に、「人の子なれば、まだ心勢ひなかりければ、とどむる勢ひなし」とあるように、女をとどめる勢ひがないことを悲しんだことと考えられる。このように見ると、男は女を止めたいと思うが、親に対して女を止める勢ひや手段を持たない。「女もいやしければ、すまふ力なし」と、抗することができない。

歌の後には「と詠みて絶え入りにけり」とあり、それがどのようなものであったのか、またそれがいつからいつま

で続いたのかを詳しく語っている。「なほ思ひてこそいひしか」は、「親として子のためを思つてこそ口出したのだったが」（新大系）、「やはり女を深く愛していたからこそ、あのような歌をよんだのであったな」（全釈）などの解がある。この句が歌の後に続いていること、すぐ後の「いとかくしもあらじ」との繋がりからして、やはりこのような歌を詠んだのは女を思つてこそそのように言つたのであろうが、実際に絶え入るようなことはあるまいということである。つまりこの歌で今日は以前にまして悲しいと言つたのは、女を思う心がそのように言わせたのであろうということである。親は、男の「思ひ」に対して、「さかしらする親ありて、思ひもぞつくとして、この女をほかへ追ひやらむとす」、「さる間に思ひはいやまさりにまさる。にはかに親、この女を追ひうつ」と、男の「思ひ」を危惧し、結局女を追ひ出すことになったからである。

このことは男の歌が単に思いを述べたものではなく、「真実に絶え入りにければ」という事実によつて裏付けられるものであったということである。そして、男は「とどむる勢ひなし」、「とどむるよしなし」と、女を止めたいと思つてもできなかった。そうするとこの「絶え入りにけり」というのは、結果として男に残された唯一の抵抗手段で

あつたということになる。また「今日の入相ばかりに絶え入りて、又の日の戌の時ばかりになむ、からうじて生き出でたりける」と「絶え入」った間を細かく指定するのは、それがほぼ一昼夜であることから、男の歌の「ありしにまさる今日は悲しも」の「今日」を裏付けるためと考えられる。「昔の若人は、さるすけるもの思ひをなむしける」は、男の歌の「ありしにまさる今日は悲しも」という女を止めることができない悲しみが単なる思いとしてではなく、行動に裏付けられるものであつたことを語っている。これは物語としても「昔、若き男、けしうはあらぬ女を思ひけり」の結果としてその思いの一途さを語っているのである。それに続く「今の翁、まさにしなむや」は今の老人にこのような「もの思ひ」ができるわけがないというのであるが、「さるすけるもの思ひをなむしける」を受けて、女を止めることができない悲しみのために「絶え入」ったことを言うと考えられる。このようにこの段の語り手の評語は、「ありしにまさる今日は悲しも」という本来は心の表現であるものを行動を語るものとするところが初段の評語と同様である。ただ初段の男は一気に突き進む恋をして相手に働きかけるのであるが、この段の男は「今の翁まさにしなむや」というようにこの男の特異性を語るものとなっている。

## 六、二段の「まめ男」

終わりに初段と二段は対照的に構成されていると思われるので、二段を検討することによって改めて初段を考えてみたい。

昔、男ありけり。奈良の京ははなれ、この京は人の家まだ定まらざりける時に、西の京に女ありけり。その女世人にはまされりけり。その人、かたちよりは心なむまさりたりける。ひとりのみもあらざりけらし。それをかのみめ男、うち物語らひて、帰り来て、いかが思ひけむ、時は三月のついたち、雨そほ降るにやりける、

起きもせず寝もせで夜を明かしては春の物とて  
ながめ暮らしつ

この歌は『古今集』（卷十三恋三・六一六）に、「弥生の朔日より、忍びに人にものら言ひてのちに、雨のそほ降りけるに詠みてつかはしける 在原業平朝臣」として入る。これは弥生の月初めからひそかにある女に意を伝えて後に、雨がしとしと降っていたので詠んでやったのである。この歌は、弥生の月初め以来今に至るまでの夜と昼の過ごし方である。夜は起きるでもなく寝るでもなく悶々と夜明

けを迎え、昼は一日長雨を春の物と思って眺めに日を暮らしたのである。ここでは「春の物とてながめくらしつ」は夜の過ごし方に連続するものとして明け方から日暮れまでの一日の過ごし方を述べている。即ち弥生の月初め以来の自らの女への関わり方を通して思いの深さを伝えようとしているのである。作者には、女への思いを春には付き物の長雨のせいとして自らを言い聞かせるほかないほど遣りようのない思いがあったのである。

これに対して物語は「まめ男」が意を尽くせない語らいをして帰って来て、どう思ったのか、この歌を遣ったのである。後朝の歌であるが、歌からすると暮れになって遣ったことになる。これによれば「起きもせず寝もせず」は幾夜かのことではなく女と語らった夜のことになる。その意を尽くせない思いが「うち物語らひて」に示されているのであろう。したがって上句は女との昨夜の過ごし方であり、下句はそれに対して帰ってからの男の日の暮らし方である。『古今集』の場合は上句から下句まで一貫して作者の物思いである。物語の歌の内容は、「それをかまめ男、うち物語らひて、帰り来て、いかが思ひけむ」に対応している。「いかが思ひけむ」と語り手が言ったのは、「時は三月のついたち、雨そは降る」によって「春のもの」と

ながめ暮らしつ」と詠んだからである。女のもとから帰って来て思ったであろうことと、それを長雨のせいにすることは直接には結び着かないからである。

男はなぜ「春の物とてながめ暮らしつ」と言ったのであろうか。『古今集』では、夜からの続きとして昼のそうとでもするほかない遣る方のない思いであった。物語ではそのような思いとしてではなく、昨夜の語らいに対する男の対応の仕方を語っているのである。その女は世の人よりも優り、器量よりも心が優る、そしてひとりというわけでもない（この「ひとりのみもあらざりけらし」は、初段に「女はらから」とあることと対照的である）。そのような女に男は向き合おうとするがそれができないで止むを得ず「春の物とてながめ暮らしつ」と言ったのである。作者は、この歌に込められた掴みきれない思いのよつてきたる事情を示し、それに向き合おうとする男の行動としたのである。

この「いかが思ひけむ」は、初段の「ついでおもしろきことともや思ひけむ」と対照的であるように思われる。後者は男の着ていた「狩衣」・「しのお摺りの狩衣」によって姉妹の美しさとともに男の心の乱れを表わすことができる、その関連がおもしろいのである。そしてそれは極めて直接的である。しかし、「いかが思ひけむ」は、語り手

がその意を測りかねるように、女のありようと「春の物」としての「長雨」は直接結び付くものではない。しかし「か  
のまめ男」というように女のありように誠実に向き合おう  
とする「まめ男」としてはこういう対応の仕方しかなか  
たのである。これは初段のように「しのぶの乱れ限り知ら  
れず」と、一気に突き進む恋、「いちはやきみやび」をす  
る男とは対照的である。このように解してこそ「まめ男」  
とは対立する意味で関連を持つことになる。二段の男は自  
身の思いを直接に表わしたものとは言いがたく、「まめ男」  
のこの恋への独自の関わり方を語るものとなっている。

## 終わりに

初段の「昔人は、かくいちはやきみやびをなむしける」  
は、歌を詠んで贈ることを言うのではなく、歌に詠まれた  
ことを男の行動として語るものである。それは一気に突き  
進む恋をすることである。それを可能にしたのが、自らの  
心を託することのできる対象を自らに見出すことによっ  
てである。また歌の上句と下句の意味内容を異にして、上  
句に対する対応の仕方を下句で語ることである。<sup>(14)</sup> こうし  
て『伊勢物語』は歌によって新しい物語を作り出すことが  
できたのである。四十一段も自ら見出したものによって、

姉妹の間の格差を歌においては一挙に克服しているのである。四十一段も初段と同じように他に心を開いていく男のあり方を語っていると言いうことができる。

これに対して四十段は女との別れを止めることができ  
ない悲しみを、恐らく自ら望んだのではない「絶え入」と  
いう行動によって裏付けている。初段と対照的な二段も  
「まめ男」として誠実に女に向き合おうとしてそれができ  
ず、その心を他の物に託さざるを得ないのである。ここでも上句と下句の意味内容を異にして、上句に対する対応の仕方を下句で語っている。二段も四十段と同じように他とは異なる特異な男のあり方を語っている。

『伊勢物語』は、この初段と二段によって二系列の対極的な男のあり方を展開していくことになるのである。

## 注

(1) 『伊勢物語』本文の引用は、新編日本古典文学全集（小学館）による。表記は私に改めた所がある。

(2) 片桐洋一著『伊勢物語の新研究』第一篇第一章 伊勢物語の「みやび」とその背景「一一」二頁 一九八七年九月

明治書院

(3) 窪田空穂著『伊勢物語評釈』二八〇九頁 一九五五年 東京堂出版

(4) 渡辺実校注『新潮日本古典集成 伊勢物語』「解説」一五三頁 一九七六年 新潮社

(5) 清水文雄「いちはやきみやび」広島平安文学研究会編著『源氏物語 その文芸的形成』四四頁 一九七八年九月 大学堂書店

(6) 秋山虔『新日本古典文学大系 竹取物語 伊勢物語』解説『伊勢物語の世界形成』三七三頁 一九九七年 岩波書店

(7) 『石田穰二 伊勢物語注釈稿』四四～五頁 二〇〇四年 竹林舎

(8) 『知頭抄』の引用は、竹岡正夫著『伊勢物語全評釈』による。以下、『拾穂抄』、『愚見抄』、『肖聞抄』、『惟清抄』も同じ。

(9) 中西進『万葉集 全訳注原文付(一)』(講談社文庫)

(10) 「新大系」は『新日本古典文学大系 竹取物語 伊勢物語』(岩波書店)、以下、『鑑賞日本の古典』は『鑑賞日本の古典』

4 伊勢物語・竹取物語・宇津保物語(『尚学図書』)、『集成』は『新潮日本古典集成 伊勢物語』(新潮社)、『全釈』は『伊勢物語全釈』(大学堂書店)、『新全集』は『新編日本古典文学全集 竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』(小学館)の略称である。

(11) 注(8)の「全評釈」は「心地まどひにけり」に、「思いもよらぬ美人が、しかも二人も、こんな古里に『なまめかしく』いたものだから」とある。

(12) 『古今集』の引用は『新編国歌大観 第一巻勅撰集編』による。以下同じ。なお表記は私に改めた。

(13) 石田穰二氏は、「一方は『いとなまめいたる女はらから』、一方は、容貌よりは人柄といった地味な人妻。それと対応するかのごとく、一方では男の奔放な青春の行為は「いちはやきみやび」と評されてゐるが、一方では男は「かのまめ男」とされ、歌は女に対する尽きせぬ綿々の思ひを添へる」と論じられている(『源氏物語攷その他』「伊勢物語の初段と二段」三九七～八頁 一九八九年七月 笠間書院 初出「文学論叢」第四十八号 一九七三年十二月)。

(14) このことについては、拙稿『伊勢物語』四段と九段の方法(『広島女学院大学 国語国文学誌』第七号 一九九七年十二月)において、『伊勢物語』が業平の歌の上句と下句を漢詩の一句のように捉えていると論じたことがある。